

第一回・旅順総攻撃

明治三十七年八月十九日午前六時、徒歩砲兵第一連隊第四中隊が盤竜山東堡壘に向けて初弾を発射したのを合図に、わが攻城砲兵各隊はいっせいに砲撃を開始した。ロシア側は約十五分後に応戦してきたが、わが砲兵陣地の位置確認が不十分で、その弾着はすこぶる散漫であった。砲撃は二時間ほど続けられたのち、いったん中止した。

八時三十分ごろ、椅子山、大案子山、小案子山の堡壘・砲台がわが陸戦重砲隊に、盤竜山の砲台、東鶏冠山の各砲台がわが砲兵陣地へ向かって、盛んに集中砲撃を加えてきたので、わが軍も負けてはならじとこれに応じ、一大砲撃戦が展開された。

この日の日本軍の砲撃で、ロシア側は少なからぬ損害を被った。盤竜山東・西堡壘の海軍砲や火薬庫爆発。二竜山堡壘、望台砲台、東鶏冠山北・第二・第三の堡壘、白銀山北砲台などで火砲の損壊、胸墻破壊・破損、守備兵全滅の堡壘もあった。さらに午後七時、白玉山西麓に大爆発が起こり、その火柱は夕空におそろしいまでに燃え上がった。

第一線の将兵は意気さかんで、これくらい砲弾で叩いたのだから、堡壘の内部まで破壊しているに違いない。「これなら強襲でやれる」と自信をもったのも無理はない。

これは、まったく一大錯覚で近代要塞戦の恐ろしさを身を以て知らされるのである。

旅順要塞に対する第三軍各師団の主な攻撃目標は次のとおりであった。

第一師団（東京） 鉢巻山から水師營南方の諸堡壘

第九師団（金沢） 盤竜山東・西堡壘、望台。

第十一師団（善通寺） 東鶏冠山北堡壘と同、東・西堡壘。

旅順要塞は、旅順旧市街を囲む松樹山、二竜山、盤竜山、望台、東鶏冠山と連なる山々に構築した堡壘砲台を連繋させた本防禦線と、旅順新市街を囲む大案子山、小案子山、椅子山の堡壘砲台からなっていた。（旅順要塞図参照）

この要塞防禦線の要は東鶏冠山で、四個の強堡壘（北・南・第一・第二）と二つの砲台（第一・第二）で嚴重に固めていた。

第三軍司令部の作戦は、要塞の正面というべき二竜山と東鶏冠山の間を抜いて、ここを突破口に一気に旅順を陥れる、というものだった。まさに、真っ向から勝負を挑んだのだ。戦況を視察する乃木將軍の脳裏に、十年前の記憶が想い出に違いない。日清戦争では「難攻不落の東洋一の要塞」とうたわれた旅順を、わずか一日で落とした時と、同じ作戦だったのだ。八月二十一日、乃木はこんな歌を二首詠んでいる。

弓張の月も射るなりいざ撃たん 世に仇なせる荒鷲の巢を

思ひきや十年（ととせ）の昔し龍を斬り 今又此所に鷲を撃つとは

十九日の砲撃開始とともに第一師団右翼隊が大頂子山を攻撃し、左翼隊は寺兒溝の敵を撃退して水師營南方高地を攻撃した。第九師団でも、平佐少将率いる右翼隊が、龍眼北方堡壘（通称クロパトキン角面堡）を攻撃。龍眼北方堡壘は旅順要塞防禦線の各堡壘の中で最も前面に突出しており、ここが攻撃を受ければ、背後の二竜山、水師營の砲台が援護するという迎撃態勢にあった。

二十一日午前四時、第九師団の一戸少将の左翼隊が盤竜山東堡壘とその東南の独立堡壘の攻撃にかかった。第十一師団の右翼隊は山中少将の指揮の下、最難関とされる東鶏冠山北堡壘、および第二堡壘を攻撃し、神尾少将の左翼隊は、白銀山北砲台を攻めた。

ところが、どの戦線でもロシア軍の強固な防禦線と集中砲火に前進を阻まれ、たちどころに屍の山を築いた。東鶏冠山北堡壘へ勇猛果敢に突入した本郷少佐の率いる四個中隊は、あらゆる角度からの銃撃と砲火で壊滅し、なおも突進した一隊は機関銃の掃射を浴びて全員戦死をとげた。一方、第二堡壘に向かった吉永少佐の第一大隊は、壮烈な白兵戦を展開し、多大な犠牲を払って、これを占領した。だが、退却するロシア軍の放火で火薬庫が爆発し、これが引き金となって周辺の砲台から集中火を浴びせられ、吉永大隊長以下死傷者続出し、残存兵力四十余名となった。その上、弾薬も底をついたので、生存兵士は断腸の思いで堡壘を放棄し、鉄条網下の地隙に退いて援軍を待った。わずか三時間の占領であった。

こうした戦況をみた山中少将は、周辺の砲台からの側撃を制すれば、北堡壘の突入は可能であると判断し、豊島砲兵司令官にいっそうの砲撃を要求、さらに隣接の第九師団長に連繫して即時攻撃を行なうよう要望した。そして午前八時、ふたたび東鶏冠山各堡壘に突撃を命じた。だが、ロシア軍の圧倒的火砲の前に各個撃破されて、まともむなしく退却せざるを得なかった。

軍司令官乃木大将は、二十一日未明から団子山東北高地に上って、東鶏冠山一帯の攻撃を幕僚とともに望見していた。次々と繰り出す突撃隊が瞬時のうちに消滅していく戦況に表情はしだいに憂色を深めていった。しかし、東鶏冠山攻略は旅順攻略戦上の「天王山」である。いかなる犠牲を払うとも是非とも突破しなければならない。

午後六時四十分、乃木將軍は第十一師団長に対し、「他を顧慮することなく、独立を以て攻撃を再興し、全滅を賭して目的に邁進せよ」と命令を下した。高熱を発して大孤山山堡の病舎にいた土屋中将は、ただちに山を下りて山中少将に会い、ふたたびの猛攻を厳命した。

午前一時、歩兵第二十二連隊第二大隊が苛烈な銃砲火をかいくぐって、砲台下に突撃したが、柳川大隊長以下バタバタと撃ち倒され、敵の壘上に到達したもののわずか五名、あとは累々たる友軍の死屍だけであった。同じく、南堡壘に突撃した加茂大尉の歩兵第十二連隊第二大隊も、敵の銃撃と手榴弾のために、将兵の半分以上を失うという始末。

軍司令部に入ってくる各師団の戦況報告は、ほとんど悲観的なものばかりだった。また攻城砲兵司令官からも砲弾の不足を通告してきた。この時点で、各師団は全力を出し尽くした感があった。乃木將軍は、これ以上の強襲攻撃の続行はいたずらに損害をまねくのみと判断、いったん攻撃を中止して戦線の整備をはかろうと決意、第九、第十一師団参謀長を呼び寄せた。

ちょうどその時である。盤竜山東堡壘に突入した数名の兵が白兵戦を展開し、これを機に第九師団の後備歩兵第八連隊の三上大佐以下が力戦奮闘、ついに東堡壘の完全占領に成功した。続いて、西堡壘のロシア兵に動揺がおこり、すかさず一戸少将は二個中隊をもって突撃を命じ、これもまた占領。盤竜山東・西堡壘占拠の吉報に軍司令部はもちろん、全軍の将兵が奮い立った。

乃木將軍は、第九師団正面の戦果をさらに拡張する、つまり、東西両堡壘を拠点に望台

、東鷄冠山北堡壘を攻略しようという作戦に出た。しかし、二十日以来の不眠不休で過酷な戦闘を続けてきた各師団の戦力は、もはや皆無に等しかった。とくに第九師団の被害は甚だしく、軍司令部は第一師団の軍予備として歩兵第十五連隊を差し出させた。一方、東西両堡壘を敵の砲撃から守るため、師団砲兵の主力を呉家房北方高地へ移動し、敵砲台を制圧しようとした。

大島中将は、このままでは全滅になるだけであると判断し、第十一師団と歩調を合わせて望台方面を攻撃することを決意し、歩兵十旅団の到着を待った。各隊が攻撃準備を終えて、突撃を開始したのが二十四日午前二時。

その夜はあいにく、十三夜の月が皓々と山野を照らし、その上、敵の打ち上げる照明弾で、戦場はあたかも真昼ような状況であった。突撃隊は、盤竜山砲台、虎頭山、望台、東鷄冠山北堡壘からの熾烈な十字砲火を浴びながら前進した。だが、敵の防禦網は固く、時間の経過とともに突撃隊の死傷者は増加していった。ロシア軍は逐次増援兵を繰り出し、一向にひるむ様子もない。かくして、日本軍得意の夜襲戦はことごとく失敗におわった。

じつは、この夜の日本軍の強襲はステッセル司令官に察知されていた。名将コンドラチェンコ少将は、東鷄冠山第二堡壘、二竜山、盤竜山砲台に砲を据えて待機を命じていたのだ。準備万端整えて、日本軍の突撃を待っていたのである。

惨憺たる結果に終わった強襲攻撃に、乃木將軍は「強襲攻撃を一時中止する。現在地を堅固に守り、爾後の命令を待て」との軍命令を発した。

こうして、八月十九日から続いた旅順要塞の第一回総攻撃は中止された。両軍の参加兵力と損害は以下のようなものだった。

| 日本軍 | ロシア軍 |
|------------|------------------|
| 歩兵約四十七大隊 | 歩兵約三十九大隊 |
| 騎兵四中隊 | 騎兵一中隊 |
| 砲 380門 | 重砲 25門 軽砲 363門 |
| 機関砲 48 | 機関銃 43 |
| 工兵十二中隊 | 工兵四中隊、海兵・陸戦隊十四中隊 |
| 戦闘総員5万765名 | 戦闘総員3万3700名 |
| 死傷者1万5860名 | 死傷者ほぼ1500名 |
| (戦死2323名) | |

●第一回総攻撃で被った損害は大きかった。乃木軍司令官はその回復を待って、次の攻撃準備を策定した。それまでの部隊を敵前に露出した強襲突撃を止め、軍工兵部長榊原大佐に命じて、盤竜山東・西堡壘の防禦工事とその後方の交通網の構築を急がせた。九月上旬、攻撃路（壕）の工事も進んで、

- 大頂子山—大平溝—同上東南152高地—203高地（爾靈山）
 - 南山披山（海鼠山）前方約百メートルまで。
 - 水師營第一堡壘前方約百メートルまで。
 - 龍眼北方堡壘前方約百メートルまで。
 - 盤竜山北堡壘高地脚下まで。
- 3

以上の工事が完成したので、各師団の目標を決定した。

第一師団……爾靈山付近の諸堡壘・水師營の諸堡壘の攻撃。

第九師団……盤竜山東・西堡壘の守備。龍眼北方堡壘・盤竜山北堡壘の攻撃。

第十一師団……東鷄冠山北堡壘・同山砲台の攻撃。

ここに初めて、爾靈山方面を攻撃目標に定めている。各部隊は九月十九日早朝、それぞれの目標とする陣地に勢揃いし、午前八時四十分、攻城砲兵陣地から望台・東鷄冠山のロシア軍陣地に向けて砲撃を開始し、**第二回総攻撃**が始まった。

第一師団の中村少将の左翼隊は水師營第一、第二、第三、第四の全堡壘を奪い、右翼隊の友安少将は南山披山を占領し、後備歩兵第十六連隊長・新妻中佐は二〇三高地の西南角に到達し、全軍をあげて総突撃を取行した。戦闘は機関銃・手榴弾・銃剣・投石が入り乱れての凄絶な白兵戦を展開し、ようやく山頂の一角を占拠した。

ところが、ロシア軍の猛烈な逆襲をうけて、二〇三高地はいとも簡単に奪還され、なおも第二線散兵壕からも駆逐されてしまった。突撃隊の兵力は三分の二を失い、新妻連隊長も負傷するといった惨状であった。

松村師団長は最後の予備隊・後備歩兵第十五連隊本部と第二大隊を右翼隊に投入し、香月中佐が指揮をとって、山頂をめがけて突進し、山の斜面で激烈な一大戦闘を繰り返したが、ロシア軍の頑強な抵抗に味方の屍を累積させただけにおわった。部隊を整頓したところ、戦闘兵力の減少におどろき松村師団長は、二〇三高地の攻撃を中止し、占拠地点の確保も難しいと判断し、右翼隊に退却を命じた。

第九師団は九月二十日、右翼隊と左翼隊の各部隊が十六時間におよぶ激烈な戦闘の末、ついにロシア軍防禦線の橋頭堡・龍眼北方堡壘を完全占領した。

この十九日からの戦闘は、第二回総攻撃の前半戦ともいふべきものであった。

| 日本軍 | | ロシア軍 | |
|----------|------|---------|--|
| 歩兵約二十四大隊 | | 歩兵十六大隊 | |
| 騎兵約三中隊 | | 騎兵一中隊 | |
| 砲約 257門 | | 野砲 44門 | |
| 機関砲 24門 | | 徒歩獵兵十一隊 | |
| 工兵約六中隊 | | 乘馬獵兵二隊 | |
| | | 要塞備砲 | |
| 約2万6400名 | 戦闘総員 | 不明 | |
| 924名 | 戦死者 | 不明 | |
| 3925名 | 戦傷者 | 不明 | |

●爾靈山への攻撃中止後、第三軍の各部隊はそれぞれの攻撃目標に対する陣地・交通壕の構築を進め、近日決行予定の防禦線正面突破の一戦に準備をした。兵員・武器・弾薬の補充も着々と進んでいた。そこへ新鋭の攻城砲・28センチ榴弾砲が六門到着し、かねて準備していた砲台に配備されて、攻撃軍に新たな威力を加えた。28センチ榴弾砲は海岸砲で、この巨砲を据え付けるには三ヵ月は必要とされていたが、昼夜におよぶ懸命の努力で、わずか一ヵ月で前線にその威容をみせたのである。

●一方、ロシア軍も二十三日以降、防禦陣地の補強にとくに力を入れはじめた。北太陽溝・爾靈山・三里橋北方高地・椅子山・案子山などの堡壘には新しく防禦施設を構築し、鉄条網を嚴重に張り巡らせた。

日本の砲兵部隊は、南山披山から旅順港の一部が見渡せるので、山頂に観測所を設置して、港内のロシア艦隊を砲撃した。効果は抜群で、戦艦ポペダ、セワストーポリ、ベレスウェトに命中弾が炸裂、艦体に多大な損傷を与えた。この結果、日口両軍は爾靈山（203高地）の重要性に着眼し始めたのである。

28センチ砲の破壊力は強大で、軍司令部は大本営に追加送付を要求し、十二門が追加されて、合計十八門となった。ロシア軍はそのすざましい破壊力に恐怖をいだいた。

第二回総攻撃の後半戦は、十月二十六日午前八時三十分、この28センチ榴弾砲の轟音を合図に決行された。軍命令は以下のごとし。

- 一、第一師団は、松樹山堡壘、さらにその後方高地を攻撃すべし。
- 一、第九師団は、二竜山堡壘、盤竜山東堡壘東南の独立堡壘（一戸堡壘）、ついで両堡壘間の後方高地を攻撃すべし。
- 一、第十一師団は、東鶏冠山北堡壘、第二堡壘、同山砲台、ついでその後方高地を攻撃すべし。

わが攻城砲兵は、28センチ砲を目標の堡壘・砲台を一斉に射撃した。ロシア軍も応射し、両軍の砲撃戦は六時間余りも続いた。28センチ榴弾砲の威力はすざましく、しだいにロシア軍の砲火はおとろえていったので、射撃目標を松樹山と二竜山堡壘前方の散兵壕などに変換し猛撃を加えた。

第一師団は、松樹山堡壘前方の散兵壕に突入し、これを占領。第九師団右翼隊は二竜山堡壘の斜堤散兵壕を奪い取り、一戸少将の左翼隊も盤竜山堡壘の一角を占領した。各師団は占領した地点から坑道掘進を開始した。ロシア軍も対抗して坑道を掘り進め、爆薬をもって互いの坑道を爆破しあう、血みどろの坑道戦が展開された。

二十七日、二竜山堡壘の外壕を偵察すると、外壕の幅12メートル、深さ10メートルもあり、壕内は東西から側射できる構造であると判明した。ロシア軍が誇る永久堡壘の鉄壁の構築を思い知らされたのである。二竜山堡壘を攻撃した第九師団右翼隊は、敵壘の集中射撃と松樹山の側防火器に阻まれた。一方、一戸少将の左翼隊は、盤竜山東堡壘の東南の独立堡壘（P堡壘）を攻撃。一時、占領したがロシア軍の逆襲で奪還されてしまった。

これを見た一戸少将は憤然決起し、大島師団長に電話を通じて、「この上は、予みずから戦線に進み、ただちに敵を撃退せんのみ、閣下意を安んじ給へ」と伝え、予備の一中隊を率いて、突撃隊の先陣に立って、これを指揮した。将兵の意気はあがり、一挙に敵壘に突入して、再び堡壘を回復した。一戸少将の奮戦は、大本営へ報告され、さらに明治天皇に奏上された。これ以後、この独立堡壘を「一戸堡壘」と呼ばれることになる。

しかし、第十一師団の右翼隊は東鶏冠山北堡壘の一角を奪ったものの、同山第二堡壘に突撃した歩兵第四十四連隊第二大隊は、周辺の砲台の集中砲火を浴びて苦戦、なおも突撃した一隊は機関銃の猛射によって全滅。同山第一堡壘、砲台に向かった中央隊児玉少佐の歩兵第十二連隊は、砲台占拠に成功したが、やはり周辺の堡壘の側射をうけて死傷者続出し、残兵を集めて退却した。

東鶏冠山北堡壘の突入に血気にはやる突撃隊（歩兵第二十二連隊第二大隊）は、攻城砲

兵の援護射撃を待てず、無謀にも突撃を敢行した。たちまち盤竜山砲台、望台砲台の猛火をあび、屍の山を築いた。右翼隊長山中少将は予備の一中隊を増加させ、再度の突撃を命じたが、堡壘正面は強固そのもの、敵の銃砲火と手榴弾の反撃にあい、またもや死傷者を続出、おびただしい鮮血を流しただけであった。

この間、第一師団は松樹山の外壕からの坑道作業を行い、第九師団は二竜山の外壕外岸壁の爆破準備と、盤竜山三堡壘の後方障害物破壊作業に取り掛かっていた。だが、これら三堡壘の攻撃作業の完成には、なお数日を要するとみた乃木軍司令官は、ここに第二回総攻撃を打ち切ることに決定した。

| 日本軍 | | 参加兵力 | ロシア軍 | |
|-----------|------|------|-----------|--|
| 歩兵四十五大隊 | | | 歩兵三十一大隊半 | |
| 騎兵五中隊 | | | 騎兵一中隊 | |
| 砲 4 2 7 門 | | | 砲 6 4 3 門 | |
| 機関砲 7 3 | | | 機関銃 4 6 挺 | |
| 工兵約十二中隊 | | | 工兵四中隊 | |
| 約4万4100名 | 戦闘総員 | | 約3万2500名 | |
| 1092名 | 戦死者 | | 616名 | |
| 2738名 | 戦傷者 | | 3837名 | |
| | 失踪者 | | 79名 | |

第三回旅順総攻撃

三回に及ぶ攻撃の結果、旅順要塞の永久堡壘が想像以上に頑強であることが判明した。日本軍の28センチ榴弾砲の射撃が、ロシア軍陣地にさほど損害を与えていないことも意外であった。巨弾のすざましい大爆音と炸裂にロシア軍陣地の掩蓋や兵士が吹き飛ばされたが、厚さ1メートルのペトン（コンクリート）の堡壘の内部は少しも破壊されていなかった。三十万トンのペトンで構築された堡壘はまさに鉄壁の「永久堡壘」そのものであった。それに28センチ榴弾砲の砲弾は不発弾も多かった。

乃木軍司令官は、松樹山・二竜山・東鶏冠山北の三堡壘の攻撃作業を急がせるとともに盤竜山東・西・北の各堡壘からの旧囲壁へ向かう攻撃通路の掘進を指令し、二竜山・東鶏冠山北の両堡壘を陥落後、ただちに望台・盤竜山砲台に突撃し、その南方に占領区域を拡大して要塞防禦線を粉碎せよ、と命じた。旅順攻略が挫折を繰り返す中、大本営に、バルチック艦隊が十月十五日にリバウ港を出航したとの報が入った。

海軍部では、バルチック艦隊は遅くとも明年一月上旬には日本近海に到る。もし旅順攻略が長引くなら、海戦準備のために艦艇の修理の必要から、旅順海上の封鎖を中止しなければならぬ。一刻もはやく旅順を攻略し、旅順艦隊を撃破してほしいと強硬に要望してきた。大本営も海軍側の要望を容れ、満州総司令部に攻略の速攻を促すとともに、新たに第七師団を第三軍へ加えた。乃木はこの第七師団を軍の総予備隊とした。第七師団は第三回総攻撃でもっとも戦死・戦傷者を出すことになる。